岩内町立小学校統廃合検討比較表

資料1

平成24年4月

項目＼使用校舎		パターン1：東小と中央小校舎を使用(西小廃止)		パターン2：中央小と西小校舎を使用（東小廃止）		パターン3：東小と西小校舎を使用(中央小廃止)	
重点検討項目	児童数	○ ▲	中期的には、新1年生は35人以上確保出来る 今後、中央小に児童が集中する可能性がある	○ ▲	中期的には、新1年生は35人以上確保出来る 今後、中央小に児童が集中する可能性がある	○ ○	中期的には、新1年生は35人以上確保出来る 2校とも同程度の児童数が確保出来る
	学級数	○ ▲	中期的には、新1年生は2クラス確保出来る 今後、東小が1学年1クラス編成となる可能性がある	○ ▲	中期的には、新1年生は2クラス確保出来る 今後、西小が1学年1クラス編成となる可能性がある	○ △	中期的には、新1年生は2クラス確保出来る 3パターンの中で最も2クラス編成を持続できる
	学校区域	▲	学校間の距離が近すぎることから、中央小に近い児童も東小に通うことになる	△ △	比較的、地理的なバランスが取れた学校区を設定できる ほぼ中学校と同じ学校区域を設定出来る	○ △	地理的なバランスが取れた学校区を設定できる 中学校と同じ学校区域を設定出来る
	通学距離	○ ▲	大和、御崎、清住の児童は通学距離が短縮となる 野束、敷島内の児童は大幅に通学距離が伸びる	▲ ▲	東山、大浜の児童は通学距離が伸びる 西小に通う宮園の児童は大幅に通学距離が伸びる	△ ▲	宮園の一部児童は、通学距離が短縮となる 万代、栄、高台、宮園など一部児童は、通学距離が伸びる
	在校児童	▲	西小の児童が中央小に移動となる 中央小の栄、宮園の児童が東小に移動となる 移動対象児童は、340人～370人程度と見込まれる	△	東小の児童が中央小に移動となる 中央小の宮園、野束(二中区)の児童が西小に移動となる 移動対象児童は、230人～260人程度と見込まれる	△	中央小の児童が地区により、東小、西小に移動となる 移動対象児童は、300人程度と見込まれる
	学校施設(耐震等)	▲ ○	全ての小学校が築30年以上経過しているが、東小は昭和47年と最も古い 耐震補強工事が終了している	△ ○	両校とも昭和52年の建築で、この中では優位である 耐震補強工事が終了している	▲ ○	全ての小学校が築30年以上経過しているが、東小は昭和47年と最も古い 耐震補強工事が終了している
	学校設備 （給排水、音響、暖房等）	▲	・暖房改修は終了しているが、給排水、音響等の改修が必要である ・東小は、普通教室転用による黒板等の改修が必要となる	△	・暖房改修は終了しているが、給排水、音響等の改修が必要である ・面積が大きいことから、最も改修費用の負担が大きい	▲	・暖房改修は終了しているが、給排水、音響等の改修が必要である ・東小は、普通教室転用による黒板等の改修が必要となる
参考検討項目	中学校との接続		東小の多くの児童が一中に入学する 中央小の万代など一部を除き二中に入学する		中央小の多くの児童が一中、西小が二中に入学する ほぼ小学校と同じ人間関係で中学入学となる		東小が一中、西小が二中に入学する 小学校と同じ人間関係で中学入学となる
	町内会との連携		西小地区の町内会との関わりが薄れる懸念がある		東小が密接に関わってきた町内会との関わりが希薄になる		市街地中心部の町内会の関わりが東西に分断される
	地域バランス		市街地の東、中央地区に集中し、東西の地域バランスが良くない 中心市街地の活性化が図られる		比較的、地域バランスは良い 中心市街地の活性化が図られる		東西に配置されることから、地域バランスは良い 中心街の空洞化が懸念される
	廃校後の活用		・公共施設の少ない西部地区にとっては、重要施設である ・全町をエリアとすれば、3校の中では立地的には劣っている ・1階に広いプレールームがあり、多目的な活用が可能である		・幹線道路に面し、商業施設も点在していることから、公共施設の立地場所としては適している ・比較的コンパクトな造りであり、無駄のない活用が可能である		・新役場庁舎、病院に隣接し、立地的に最も優れている ・体育館が広く、今まで以上に町民体育館的活用が可能である ・校舎が広いため、維持管理費の負担が大きい
	今後の町の土地・居住施策等との関連		・大規模な東山、宮園団地、更に栄団地の建設により、比較的人口集中地区に学校が配置されている ・今後も、住政策的には整備が進む場所となっている		・公営住宅の建替が行われた、東山、大浜地区は、今後も除却地の宅地造成が期待できるが、学校が今より遠くなることが懸念される		・公営住宅の建替が行われた、東山、大浜地区、更には、公営住宅が除却された東山、大浜、野束地区は宅地造成が期待できることから、学校配置と連動している

総合評価	▲	・中期的には、2クラス編成を維持出来るが、これが崩れた場合の新たな学校区設定が難しい。 ・中央小に児童が集中する懸念がある。 ・地域バランスが悪く、徒歩通学の距離が伸びる児童が多い。 ・2校の学校施設に大きな差が生じる。	△	・中期的には、2クラス編成を維持出来るが、これが崩れた場合の新たな学校区設定が難しい。 ・中央小に児童が集中する懸念がある。 ・2校とも昭和52年建築で、校舎、体育館も広く、この組合せでは最も優れている。 ・比較的、地域バランスが図られている。	○	・中長期的に、2校のバランスある児童数が確保出来、2クラス編成が可能である。また、2校のバランスが崩れた場合には、柔軟な学校区変更が可能である。 ・地域バランス、徒歩通学の距離、同規模な学校施設であるなど、均衡が取れた配置・設備である。

※評価ポイント：中長期的に1学年2クラスを確保することを最重点に、学校配置（通学距離、学校区バランス）、学校施設規模などを考慮し、総合評価を行った。